

南牧村での陸産貝類調査（その2）

茂木 誠（群馬県立自然史博物館）

1 はじめに

これまでに南牧村に生息する陸産貝類については、南牧村史(1981)、高橋(1984、1990)の報告がある。最後の報告から20年以上が経過した本地域を昨年度4月より陸産貝類の生息状況調査を行っている。今回はその途中経過、また、千原・大仁田の2地点の報告を行う。なお種名に関しては環境庁(1998)に準じている。

2 調査結果

今回までに調査を終えた地域では、現在のところ24種を発見できている。

千原団地（図1）では、ウスカワマイマイ、エンスイマイマイ、オカチョウジガイを発見した。大仁田ダム周辺（図2）では、ウスカワマイマイ、ツムガタモドキギセル、コハクガイを発見した。また、大仁田ダム周辺では、大量のウスカワマイマイ幼貝の死殻や、落ち葉の中で冬越しをする複数の個体（図3）の発見があった。



図1 千原団地



図2 大仁田ダム周辺



図3 ウスカワマイマイ

3 まとめと今後の課題

今年度も南牧村では絶滅危惧種を含め多様な種の発見ができ、この地には豊かな自然が残っていると見える。しかし今回、千原団地、大仁田ダム周辺の2地点の調査では、この地の周辺で普通に見られる種を発見できず、平野部の住宅地や畑地で見られる種と傾向と同じであった。この2地点の環境の共通点は開発かもしれない。それぞれの開発によって森林消失、草地化、コンクリートなどの構造物に伴う高温化・乾燥化が生じ、周辺で普通に見られる種が生活しづらい環境が生まれた可能性がある。また、この2地点で多く見られたウスカワマイマイは平野部の住宅地の周囲では普通に見られる種であるが、山地や森林では見かけない種である。陸産貝類は生活地を離れ、他の地域へ移り住むことを苦手とする生物であることから、この2地点で見られたウスカワマイマイは、どこからか移入した上で、現在の環境に適応したと思われる。

現在のこの2地点の生活環境へ、周辺で見られる種が侵入し定住するのは容易ではなく、この2地点における食物連鎖の役割をウスカワマイマイなどが担っていると考えられる。現在ここで見られる種を駆逐する必要性を緊急には感じないが、今後周囲に何らかの不具合が発生するかどうか、生物相全体の推移を注目する必要がある。

キーワード：陸産貝類、南牧村、千原団地、大仁田ダム、ウスカワマイマイ